清純ナースと豊艶女医
ときめきの桃色入院生活

早瀬真人
挿絵／クマトラ

立ち読み版

KTC
KIKI TIME COMMUNICATION

Contents

目次

第一章　小悪魔ナースの手コキ……4
第二章　優等生ナースとの初体験……43
第三章　屋上での騎乗位エッチ……91
第四章　美人女医の前立腺責め……130
第五章　純情ナースの過激コスプレ……184
第六章　悦楽と昂奮のハーレム狂宴……236

登場人物 *Characters*

三崎 孝太郎
(みさき こうたろう)

高校三年生。単純でお調子者だが、人情には厚い健康優良児の童貞少年。子供を助けたことで手足に大怪我を負い入院することに。

篠崎 沙也香
(しのざき さやか)

孝太郎が入院した聖邦総合病院の正看護師。二十二歳。孝太郎の自宅近くに住んでいた憧れの人。清楚で可憐、献身的な女性ながら、嫉妬深い一面も。

高木 玲子
(たかぎ れいこ)

聖邦総合病院の外科に勤務する女医。背が高く、黒いタイトスカートがよく似合う、女王様タイプのクールでグラマラスな三十二歳。離婚歴がある。

富永 麻衣
(とみなが まい)

聖邦総合病院、泌尿器科勤務の正看護師。二十六歳。外見は優等生タイプのナースだが、実はエッチ大好きの快活なイケイケお姉さん。

栗原 桃子
(くりはら ももこ)

聖邦総合病院に勤める准看護師の十九歳。ベビーフェイスで初心な感じに見えるが元子ギャルで、自意識の強い小悪魔的な性格。巨乳。

第二章　優等生ナースとの初体験

1

桃子のおかげで、孝太郎は入院以来、初めてすっきりとした顔つきで朝を迎えた。
運動不足で重たかった身体が、今日は羽が生えたように軽い。
元子ギャルナースの手淫は、童貞少年に凄まじい昂奮と快楽を与えた。
手だけで、あれだけの恍惚を覚えたのである。
フェラチオやセックスなら、どれほどの感動を受けるのだろう。
いや、相手が桃子ではなく沙也香だったら……。
その光景を想像しただけで、股間の逸物は再び熱い疼きを訴えた。
（やんなっちゃうな。昨日あれだけ出したのに。でも……退屈な病院生活も、こんなおいしい思いができるなら楽しいかも）
現金にもそう考えた孝太郎だったが、やはり沙也香のことが気になってしまう。
優美なお姉さんの面影は頭の中から片時も離れず、童貞少年は紛れもなく彼女に恋

い焦がれているといっても過言ではなかった。
（沙也香姉ちゃん、俺のことをどう思ってるんだろう。やっぱり、弟のようにしか考えていないのかな）
沙也香ほどの愛くるしい女性なら、交際している男がいても不思議ではない。
おそらく、これまでにもアタックしてきた輩は大勢いたはずだ。
孝太郎は来年就職するつもりでいたが、今の時点で、高校生と社会人では釣り合いがとれるとはどうしても思えなかった。
（もし、姉ちゃんのつき合ってる相手が医者だったら……とても敵わないよな）
一転して気分を鬱にさせた直後、扉がノックされ、引き戸がスッと開けられる。
「……あっ」
姿を現したのは沙也香と、孝太郎の手術をしてくれた女医の高木玲子（たかぎれいこ）だった。
玲子は両手を白衣のポケットに突っこみ、沙也香はカルテを挟んだバインダーを手にしている。一昨日の夢精を思いだした孝太郎は、気まずそうに頬を赤らめた。
「おはよう」
「お、おはようございます」
「どう、腕の調子は。痛む？」

「いえ、大丈夫です」
沙也香は何事もなかったかのように、いつもと同じ表情をしていたが、恥ずかしくてどうにも顔が見られない。
孝太郎は自然と、質問を投げかけてきた玲子を注視した。
目鼻立ちのはっきりとした、彫りの深い美貌が瞳に飛びこんでくる。
細い弧を描く眉、流線型のメガネが知的でクールな印象を与えていたが、ふっくらとした唇とインナーの胸元を膨らませている豊かなバストが凄まじいセックスアピールを感じさせた。
(あ、相変わらず、色っぽくてグラマーな先生だな)
沙也香から聞いた話によると、玲子は三十二歳、一度離婚歴があるようだ。
外科医としての腕も確かで、患者からの評判もすこぶるいいらしい。
背が高く、黒いタイトスカートがよく似合う、女王様タイプの大人の女性だった。
「足のほうは?」
「痛みは、だいぶなくなりました」
「ちょっと診てみましょう。タオルケットを捲るわね」
布地が捲られ、玲子が足側に移動する。そして包帯を解き、湿布薬を取り除くと、

足首にやたらひんやりとした手を添えてきた。
「腫れは引いているようね。ちょっと動かしてみるから、痛かったら言ってね」
玲子はやや前屈みになり、孝太郎の右かかとに手のひらをあて、足首をゆっくりと回していった。
インナーは胸元がやや開いているため、胸の谷間がはっきりと覗き見える。
(れ、玲子先生のおっぱいも、桃子さんに負けないぐらいすごい!)
背中に押しつけられた桃子の巨乳の感触を思いだした孝太郎は、すかさず脳裏に淫らな妄想を描いた。
(大人の女の人のおっぱいは、どんな感じなんだろう。やっぱり若い女の子よりも柔らかくてふっくらしているのかな。玲子先生だったら、パイズリぐらいしてくれても不思議じゃないぞ)
かつては人妻だっただけに、エッチの経験も桁違いに豊富だろう。
ハンドボールを二つ仕込ませたような乳丘に、ぎらつく視線を注いでいた孝太郎は、無意識のうちにペニスへ熱い血流を漲らせていった。
股間がムクムクと膨らみはじめ、またもや堪えきれない情欲が込みあげてくる。
パジャマの股間は、あっという間に三角の頂を描いていった。

（パイズリばかりじゃない。フェラチオだって、きっとものすごい……!?）
にやついていた孝太郎の第六感に、殺気の気配が伝わってくる。
ハッとして顔を横に向けると、玲子の真横に立っていた沙也香が唇を引き結び、厳しい視線を注いでいた。
（あっ、いけね。おチンチンが……）
どうやら欲情している姿を、憧憬のお姉さんに気取られてしまったようだ。
気恥ずかしさから目線を逸らし、ギプス越しの両手で股間をそっと覆い隠す。
「どう？　痛くない？」
「あ、は、はい。ちょっとピリッとくるときはありますけど」
「そう、完治まで、もう少しかかりそうね」
「……そうですか」
寝ているばかりでは、気が滅入ってしまう。
孝太郎は渋い表情をすると、上体を起こした玲子に質問を投げかけた。
「入院の期間は、どれくらいになるでしょうか？」
「経過をみてからじゃないと何とも言えないけど、単純骨折だし、あと二週間ぐらいかな」

「早くなる場合もあるわけですね？」
「もちろんよ。でもギプスを取るには、それから一ヶ月ぐらいはかかるわよ。通院してもらって、こちらも経過をみてからの判断ということになるわね」
玲子の言葉を聞いた孝太郎は、がっくりと肩を落とした。
つまり高校生活最後の夏休みは、丸つぶれということになる。
思い出作りに様々な予定を計画していたものの、すべてがキャンセルという悲しい事実に、深い溜息が洩れてしまう。
「ふふっ、そんなに悲観することはないんじゃない？」
「え？」
顔を上げると、玲子が意味深な笑みを浮かべている。
孝太郎は、怪訝な顔つきで問いかけた。
「ど、どういうことですか？」
「院内のナースたちは、寄ればあなたの噂話ばかりしてるわよ。病院生活は退屈で地獄だったなんて言う人もいるけど、つまりあなたの場合は、悪いことばかりじゃないってこと」
やはり子供を助けたことが、いまだに好印象を与えているのだろうか。

沙也香をちらりと見遣ると、彼女は我関せずとばかり、カルテにペンを走らせている。

孝太郎の視線の先に気づいたのか、玲子は含み笑いを洩らしながら言い放った。

「うちの病院は、かわいいナースたちが揃ってるものね。あなたも、気になる子がいるんじゃない？」

「そ……そんな」

図星を突かれ、顔がカッと熱くなってしまう。

孝太郎が目を伏せると、美人医師は身体の調子を立て続けに聞いてきた。

「他に具合の悪いところはない？　食欲がないとか、よく眠れないとか」

「いえ、取り立ててないです」

しいてあげれば、一番難儀なのは自由にオナニーできないことなのだが、もちろんそんなことは口が裂けても言えない。

腰をもぞりと動かすと、玲子は孝太郎の不自然な格好に気づいたようだ。

「どうしたの？　変なところに手をあてて」

「え？　あ、あの……」

ペニスは萎靡しかけていたものの、勃起したときにあらぬ方向に突っ張った牡茎は、

いまだパジャマの布地をこんもりと盛りあがらせている。
孝太郎が赤面すると、玲子はしたり顔で小さく頷いた。
「ふうん、そういうこと。それが一番つらいのね」
さすがは人生経験豊富な大人の女性だけに、男の生理もよく理解しているようだ。
再び沙也香に目を向けると、彼女は一昨日の出来事を思いだしたのか、初めて目元を赤く染めた。
「あなたの年頃なら無理もないわ。精子を作りだす機能が活発なんだもの」
入院生活三日目での夢精に、孝太郎がバツの悪そうな顔をすると、玲子は突然話題を変えた。
「ところで、お風呂に入りたいでしょ？」
「えっ⁉　入りたい、入りたいです！」
身体は毎日濡れタオルで拭かれていたが、真夏だけにすぐに汗ばんでしまう。
やはりシャワーのお湯を全身に浴び、できれば湯船にも浸かりたい。
一度も洗っていない髪の毛も洗髪したかった。
「入浴時間は三十分よ。夕食が終わった頃でどうかしら？　お風呂はまだ無理だろうから、シャワーだけになるけど」

「け、けっこうです！」
「篠崎さん、予約のほう頼むわね」
「はい」
「それじゃ、孝太郎君。また様子を見にくるわ」
「ありがとうございます」
破顔一笑で答えた孝太郎に、玲子は笑みを返しながら顔を耳元に近づけてくる。
そして、甘く囁くように呟いた。
「担当のほうには、ちゃんと話しておくから」
「は？　は、はい」
グラマー医師はそれ以上何も言わず、出口に向かって大股で歩いていく。
（ちゃんと話しておくって、いったい何のことだろう？　やけに持って回った言い方だったけど……）
玲子が病室から出ていく姿を、孝太郎はそれほど深く考えずに見送った。
沙也香が、タオルケットを身体にそっとかけてくる。
「孝太郎君……お大事に」
「あ、沙也香姉ちゃん。ありがとう」

優美なお姉さんの言葉には、なぜか張りがなく、顔色もいつになく冴えなかった。

2

その日の夕食後、孝太郎はオバさん看護師の助けを借り、パジャマからガウンに着替えたあと、ベッドから下り立った。

ガウンは、サウナで着るような薄い布地のものだ。

「パンツは、穿かなくてもいいわね。すぐに脱ぐんだから」

「そうですね」

オバさん看護師が腰の紐を結んでくれているあいだ、孝太郎は窓から、病院に隣接している看護師寮を見つめた。

沙也香は日勤の仕事を終え、すでに帰宅の途へと就いているはずだ。

(明かりがついてる。やっぱり帰ってるんだ)

女子寮は、病室の窓から見えない位置に建てられていたが、二階の一番角にある孝太郎の個室からだけは寮の一部が覗き見えた。

一階に住む沙也香の部屋は、カーテンがぴっちりと閉められている。

（それにしても、今日の沙也香姉ちゃん。あまり元気がなかったな）
やはり一昨日の情けない姿を晒したことを、まだ怒っているのだろうか。
「じゃ、行きましょうか。一人で歩ける？」
「はい、大丈夫です」
孝太郎はいったん思考を中断し、オバさん看護師の案内のもと、浴室に向かった。
シャワーだけとはいえ、久方ぶりの入浴に心がウキウキしてくる。
浴室は同じ階の反対側にあり、それほど歩かずに到着した。
オバさん看護師が扉を開け、中へと促す。脱衣場に足を踏み入れた瞬間、一人のナースの姿を捉えた孝太郎は、すぐさま緊張の面持ちに変わった。
（この人……どこかで。あっ、そうだ！　入院初日に病室の花瓶を替えに来たナースだ。確か、富永麻衣（とみながまい）って言ってたような）
胸のネームプレートには、『富永』の苗字が印刷されている。
孝太郎が頭をペコリと下げると、ショートヘアのナースは白い歯を見せた。
清潔感いっぱいの黒髪、抜けるような白い肌、すらりとした体型。
外見はいかにも真面目な優等生タイプという雰囲気だったが、決して堅苦しさは受けない。笑うと目が細くなり、それが愛嬌を感じさせるのか、何でも許してくれそう

な優しいお姉さんという印象だった。
「それじゃ、あとはよろしく頼むわね。私はこれであがるから」
「はい、わかりました。お疲れ様です」
オバさん看護師は麻衣にひと言告げたあと、脱衣場から出て浴室の扉を閉める。
孝太郎ははにかみながら、目の前に佇む麻衣をじっと注視した。
(この人が、入浴の世話を……してくれるのか)
癒しという点では沙也香と似たタイプなのかもしれないが、穏やかな笑顔を見ていると、麻衣のほうがくだけているように思える。
(若く見えるけど、いくつぐらいなんだろう? 人当たりも良さそうだし、もしかすると、けっこう大人の女の人かもしれないぞ)
すでに彼女は入浴介護の準備を整えていたのか、ナースキャップを取り外し、パンストも脱いで生足を露わにしていた。
すらりとした長い足を見ているだけで、またもや股間が反応してしまいそうだ。
「孝太郎君、こんばんは。私のこと覚えてる?」
「え、ええ。覚えてます。富永麻衣さんですよね?」
「あっ、覚えててくれた。うれしいわ。今日は私が入浴のお手伝いをするから、よろ

しくね」
「よ、よろしくお願いします」
麻衣は鈴を転がしたような声で喜びを表現すると、ゆっくりと近づいてくる。そして微笑を浮かべたまま、白魚のような指を伸ばしてきた。
「じゃ、ガウンを脱がせますね」
腰紐が解かれ、そのまま背後に回った麻衣がガウンを肩口から抜き取っていく。
(裸を見せなきゃならないなんて、やっぱり恥ずかしいな)
孝太郎は全裸になると、すかさず両手で股間を覆い隠した。
「ちょっと待ってね。手が濡れないように、ビニールで保護するから」
麻衣が棚に置いてあったビニール袋とゴム輪を手に取り、前面に回りこんでくる。
「じゃ、右手のほうを上げてくれる?」
目の前で腰を落とされると、孝太郎は口元をひくつかせた。
(み、見えないだろうな)
左手で股間を隠し、右手を恐るおそる上げていく。
麻衣は平然とした顔つき、慣れた手つきでギプスにビニール袋を被せ、腕にゴム輪を通していった。

（なるほど。これなら水を被っても濡れないわけだ。それにしても……かわいいな）
玲子の言っていたとおり、聖邦総合病院は美人ナースが多いようだ。
孝太郎の中で、沙也香のナンバーワンは揺るぎなかったが、ナンバーツーは果たして麻衣か桃子か、いくら考えても答えは出そうになかった。
「ゴム、きつくない？」
「大丈夫です」
「じゃ、左手ね」
今度は右手で股間を覆いつつ、左手を慎重に上げていく。
同様の手順を踏み、両腕のギプスの部分がビニール袋ですっぽりとくるまれる。
「これで気兼ねなく、さっぱりと汗を流せるわよ」
「頭も洗ってもらえるんですよね？」
「もちろんよ」
麻衣はすっくと立ちあがると、スポンジとタオルを手に、孝太郎の腕を取りながらバスルームに歩んでいった。
五日ぶりの入浴に、気持ちが急いてしまう。
身体を洗うことはもちろん、洗髪できることが何よりうれしかった。

（どんな風呂場なんだろう。銭湯みたいに広いのかな？）
期待感に満ちた顔つきをした孝太郎だったが、扉が開かれた瞬間、すぐさま失望へと変わった。
浴室はおよそ八畳ほどあったが、思っていた以上に狭く、民宿の浴場並みの広さだ。
浴槽は古いステンレス製で、床のタイルも隅のほうが黒ずんでいる。
清掃は行き届いているのだろうが、下手をしたら昔の家族風呂のようだった。
「滑らないように、気をつけてね」
仕方ないと思いながら、孝太郎は浴室内に足を踏み入れた。
（とにかく身体を洗えるだけでも、ありがたいと思わなきゃ）
麻衣は扉脇の取っ手にバスタオルをかけ、孝太郎をプラスチック製の椅子に促す。
そしてシャワーヘッドを手に取ると、お湯と水の栓を交互に捻った。
手のひらで温度を確かめたあと、温かいお湯が肩口からそっと注がれる。
「お湯加減はどう？」
「ちょうどいいです」
やや熱めの湯が肌の表面を流れ落ち、皮膚がピリピリとひりつく。麻衣が身体全体にシャワーのお湯をかけ流していくと、孝太郎はホッと小さな溜息を放った。

「あぁ、気持ちいい」
「ふふっ、気持ちいいでしょ。今日は、頭のほうから先に洗いましょう」
「は、はい」
「痒いところがあったら言ってね」
麻衣は髪の毛にまんべんなく湯を馴染ませたあと、いったんシャワーヘッドをフックにかけ、シャンプー液を孝太郎の頭になすりつけた。
両指でガシガシと頭皮を揉まれると、快感にも似た感覚が込みあげてくる。
髪の毛を洗髪しているだけで、心が洗われていくようだ。
孝太郎は、うっとりとした顔つきをしながら口を開いた。
「麻衣さんは、おいくつなんですか？　結婚はしてるんですか？」
「あら？　女性に、歳なんて聞くもんじゃないわよ」
「す、すみません」
「ふふっ、いいの。二十六歳、独身よ」
二十六ということは、沙也香よりも四つ年上ということになる。
（やっぱり、どことなく沙也香姉ちゃんのほうが幼い感じはするもんな。二十代後半になれば、麻衣さんのように大人っぽくなるんだろうか）

孝太郎は、心に抱いたもうひとつの疑問を何気なく尋ねた。
「麻衣さんは、外科勤務じゃないですよね？　内科ですか？　それとも神経科？」
「泌尿器科よ」
「え？」
（泌尿器科って言ったら、シモ関係のほうだよな）
頭の中に、玲子の放った言葉が甦ってくる。
（担当にちゃんと話しておくって、ひょっとして……エッチなことじゃ。あっ！　もしかすると沙也香姉ちゃん、玲子先生の言ったことが聞こえたのかも!?）
難解なパズルが解けたように、孝太郎は頭を閃かせた。
（沙也香姉ちゃんは麻衣さんが何をするか知っていて、それで突然機嫌が悪くなったんじゃ。そうだ、きっとそうだ！）
身体を洗ってもらうとき、麻衣は陰部に対してどんな対応をするのだろう。
最初は湯をかけるだけだと考えていた孝太郎だったが、童貞少年の妄想は一度走り出したら止まらない。
両足のあいだに垂れていたペニスは、ぐんぐんと鎌首をもたげ、天に向かって隆々と聳え立っていった。

（や、やばい！　また勃ってきちゃった）
シャンプーを洗い流している最中も、怒張の高まりは、いっこうに怯む気配を見せない。
孝太郎は身を屈め、勃起を両手で隠すことに必死だった。
「さあ、じゃ身体を洗いましょうね」
麻衣は少年の欲情を知ってか知らずか、石けんを手に取り、スポンジを泡立てていく。そしてタイルに跪き、背中にスポンジを滑らせていった。
このあと、麻衣は間違いなく前面部を洗ってくるだろう。
（落ち着け。落ち着くんだ）
自制を試みても、肌に触れる美人ナースの手と柔らかいスポンジの感触が心地よく、剛直は少しの萎靡も見せない。やがて背中と首筋、そして臀部を洗い終えた麻衣は、当然のことのように言い放った。
「前を向いてくれる？」
「あ……いいです」
「何言ってるの。ちゃんと洗わなきゃ、汚いでしょ？」
「で、でも……」

「恥ずかしいのはわかるけど、男の子なんだから覚悟を決めて。それにね……」
麻衣はいったん言葉を句切ると、孝太郎の耳元に唇を寄せ、吐息混じりの言葉を投げかけた。
「話は、玲子先生から聞いてるの」
「え!?」
「私が、手でして……あ・げ・る」
(やっぱり!)
思わずバンザイしたい気持ちだったが、沙也香の不機嫌な表情を思いだすと手放しには喜べない。
「もちろん、そんなに嫌なら断ってもいいんだけど……」
性欲旺盛な少年にとっては、何とも厳しい選択だ。
下腹部を見下ろすと、ペニスは一刻も早い射精を訴えるかのように、ビクビクと頭を振っている。
(手でしてくれると言っても、あそこを洗うのと同じことだもんな)
悪魔の囁きに打ち負けた孝太郎は、股間を両手で隠しながら身体を反転させた。
「よ、よろしくお願いします」

「ふふっ。孝太郎君って、ホントに真面目なのね。かわいいわ。じゃ、手を離して」
股間からゆっくり手を外していくと、剛直が麻衣の顔を突き刺すように弾けでる。
沙也香、桃子に続き、これで勃起を異性に晒すのは三人目だ。
(あぁ、恥ずかしい!)
孝太郎が下唇を噛みしめると、麻衣は微笑を湛えたまま、手のひらに石けんを泡立てていった。

3

スポンジを使うのかと思ったが、どうやら麻衣は最初から素手で洗ってくれるようだ。
昂奮のボルテージは、いやが上にも上昇していった。
「じゃ、洗うね」
麻衣がニッコリと笑い、両手を勃起に伸ばしてくる。
「うっ!」
ほっそりとした指が肉幹に絡みついただけで、孝太郎は腰を激しくわななかせた。

石けんの泡が潤滑油の役目を果たしているのか、指が肉胴の表面をなめらかに擦りあげる。
麻衣は根元から亀頭の先端まで泡を塗りたくると、揉みこむようにゆっくりと指を上下動させていった。
（な、何だよ、これ。気持ちよすぎるぅ！）
桃子の手コキも多大な快楽を与えたが、麻衣の手淫はレベルが違うように思える。
ゆったりとした動きなのに、深奥部で巨大な快楽が渦巻いているかのようだ。
孝太郎は口を半開きにしながら、美人ナースの容貌を見つめた。
麻衣は口角をやや上げ、上目遣いで童貞少年の様子をうかがっている。
余裕綽々の態度は、さすがに年上のお姉さんという感じだったが、一見真面目そうな優等生タイプの風貌だけに、そのギャップが強い刺激を与えてくるのかもしれない。
孝太郎が息づかいを荒らげていくと、身体に快感の第二波が走り抜けていった。
麻衣は右指で肉胴をしごきながら、左手のひらで陰嚢を転がしはじめたのである。
「あ、くぅぅっ」
ペニス全体がじーんと疼き、下腹部にふわふわとした浮遊感が込みあげてくる。
思わず前屈みになった孝太郎だったが、麻衣がさらに会陰から肛門に指を伸ばして

くると、さらに上体を折り曲げた。
「そ、そんな!?」
「あら？　ここも、ちゃんと清潔にしとかないとだめでしょ」
菊襞を捉えた中指が円を描くように動き、知覚神経をこれでもかと刺激していく。
そのあいだも、麻衣は右指で雁首を擦りあげるようにスライドさせているのだから、射精感はうなぎのぼりに高まるばかりだった。
（あ、あ……勘弁して。もうイッちゃうよ）
孝太郎が唇の端をピクリと震わせた瞬間、ようやく麻衣の指が肛門から離れる。ホッと安堵の溜息を放ったのも束の間、再びペニスと睾丸のダブル責めが再開された。
「あ、はぁ、はぁ」
今度は喉仏を晒し、双眸を閉じながら天井を仰いでしまう。
クチュクチュと、泡が奏でる摩擦音が何ともいやらしい。
肉眼では捉えられなかったが、先端からは先走りの汁が溢れていることだろう。
麻衣はこういった奉仕に何度も経験があるのか、抜群のタイミングでスピードの強弱をつけていった。
射精間近を迎えると、指の動きをいったん止め、しばしのインターバルを与えたあ

と、再びリズミカルに牡肉をしごきあげるのだ。
まさに寸止めと言わんばかりの抽送は、孝太郎の理性を粉々に打ち砕いていった。
一刻も早く射精したい、大量の精液を放出したいという本能だけに衝き動かされる。
「ああ、も、もう！」
孝太郎は腰を女の子のようにくねらせながら、泣き顔で咆哮していた。
麻衣はそんな少年の表情を、さも楽しそうに見つめている。
「もう何？」
「イ、イキそうです」
「そう、イキそうなの」
美人ナースははっきりとした口調で告げると、両指を怒濤のようにピストンさせた。
「ぐっ、あぁぁぁぁっ」
泡まみれになったペニスが激しくいななき、堪えきれない淫情が突きあげてくる。
「イ……イクっ」
孝太郎が虚ろな瞳を宙にさまよわせた瞬間、麻衣はまたもや手の動きを止めた。
「あぁぁぁぁっ」
輸精管をひた走っていた欲望の証が、副睾丸へと逆流していく。

行き場を失ったやるせない思いに、孝太郎は身を捩りながら呻いた。
「これできれいになったわ」
「……え？」
ぽかんとする孝太郎を尻目に、麻衣はシャワーヘッドを手にし、股間に湯を浴びせかけてくる。性器を覆っていた泡は、みるみるうちに股間から洗い落とされていった。
（ま、まさかこれで……終わりじゃ）
よくよく考えてみれば、麻衣は「手でしてあげる」と言ってはいたが、「射精させてあげる」とまでは口にしていない。
血気盛んな少年にとって、これで入浴終了ではあんまりというものだ。
勃起はいまだ萎えず、槍のように天を突き刺している。
孝太郎が恨めしそうな視線を送ると、麻衣はシャワーヘッドとスポンジを桶の中に入れながら口を開いた。
「孝太郎君、立って」
「え？　このまま立つんですか？」
「そう。前は隠しちゃだめよ」
股ぐらのほうに付着した泡を、洗い落とすつもりなのかもしれない。

直立不動の体勢をとれば、今度は美人ナースの眼前に勃起を晒すことになる。
（は、恥ずかしいな）
孝太郎がややためらいがちに椅子から立ちあがると、麻衣は初めて頬をポッと赤らめた。
「ふだんは、こんなこと絶対にしないのよ」
「……は、はあ」
素手で股間を洗ったことを言っているのだろうか。
孝太郎が相づちを打つように答えると、麻衣はやや潤んだ瞳を向けてきた。
「でも孝太郎君はかわいいから、特別なんだからね」
言い終わるやいなや、美人ナースは唇を窄め、真上から大量の唾液を滴らせてくる。
（え？）
目を剥きながら見下ろすと、肉棒は瞬く間に透明な粘液でコーティングされていった。
とろりとした唾液が、亀頭から根元に滴り落ちてくる。
（ま、まさか……お口で）
孝太郎が期待感に身を打ち震えさせた瞬間、麻衣は唇の隙間から赤い舌を突きだし、

裏茎から雁首にかけてツツッとなぞりあげていった。
「あ……あ」
ピリリとした性電流が肉茎を駆け抜け、太い血管がドクンと脈打つ。
麻衣は手淫のときと同じように、やや上目遣いで孝太郎を見あげていたが、やがて双眸を閉じると、真上から男根をがっぽりと咥えこんでいった。
（あ、ひゃあぁっ！）
ペニスが生温かい口腔粘膜に包まれ、ヌルッとした唾液がまとわりついてくる。
薄くもなく厚くもない桃色の唇が、牡の肉を挟みこむ光景の何と淫猥なことだろう。
これまで何度も夢に描いてきたフェラチオを、今自分が体験しているのだ。
孝太郎は眼下に広がる淫景を、信じられないといった顔つきで見下ろしていた。
ねっとりとした舌がくねり、蛇のように肉胴に絡みついてくる。
口の中の一番柔らかい粘膜が、亀頭の表面を微妙なタッチで撫であげる。
「く、くぅぅっ」
異性から受ける初めての口淫奉仕は、孝太郎に想像以上の快楽を与えていた。
ペニスを源泉に浸らせたような心地よさは、明らかに手コキとは次元が違う。
麻衣は亀頭を甘噛みし、クチュクチュと舌で転がすように揉みこんだあと、頬を窄

め、剛直をズズッと喉奥まで呑みこんでいった。
（あぁ、おチンチンが全部入っちゃう!?）
長大な肉の塊は、今やその根元まで口中に隠れている。
ディープスロートの知識はもちろんあったが、女性の口の中はいったいどうなっているのか、まるで手品を見ているようだ。
麻衣はやや眉根を寄せ、再び肉棒を唇の隙間から抜き取っていく。
大量の唾液をまとった肉胴は妖しく濡れ光り、蛍光灯の明かりを反射してテラテラと輝いていた。
「孝太郎君の、おっきい」
麻衣はしっとりと潤んだ瞳で告げたあと、ペニスの頭をくるくると回しながら、アイスキャンディーを舐めるように舌を徘徊させる。そして口を開け、再び怒張を口中に引きこんでいった。
「はぁぁぁぁっ」
「んっ……ンっ……ンっ」
麻衣は鼻からくぐもった声を発し、ゆったりとしたスピードから、徐々に顔の打ち振りを速めていく。

そのあいだも舌を小刻みに振動させ、裏茎を刺激してくるのだからたまらない。
巧緻を極めたテクニックは、童貞少年がとても我慢できるような代物ではなかった。
（すごい、すごいよ！　これがフェラチオ⁉　おチンチンが蕩けそうだ）
口淫奉仕が、これほどの肉悦を促すのである。
セックスなら、どれほどの快楽を与えてくるのだろう。
麻衣の口戯は、いつの間にか直線的な運動にきりもみ状の回転がくわわっていた。
顔を左右に揺らしながら、唇と舌、そして上顎と下顎を目いっぱい使い、男根を舐り倒してくる。
顔がスライドするたびに、ジュップジュップと響き渡る音がいやらしい。
（あ、あぁ。こんなの……我慢できないよぉ）
孝太郎は瞼の縁に涙を溜めながら、奥歯をガチガチ鳴らし、肛門を何度もひくつかせていた。
雄々しい波動が身体を貫き、射精欲求が怒濤のように荒れ狂う。
奉仕が始まってから、まだ五分も経過していないのである。
射精を少しでも先送りし、何とか男の面子を保ちたいのだが、麻衣の抽送は童貞少年のちっぽけなプライドなど根こそぎなぎ倒すような凄まじさだった。

美人ナースが頬をぺこんとへこませ、ペニスをこれでもかと吸引してくる。真空状態と化した口腔で肉筒が引き絞られた瞬間、孝太郎は全身の筋肉を強ばらせた。
「あ、あ……だめっ……イッちゃう」
ストローでコークを啜りあげるように、深奥部に溜まった精液が吸いあげられる。
孝太郎が背筋をピンと張らせると、麻衣はジュパッという音とともにペニスを口から抜き取った。
口唇の端から粘った唾液が溢れ落ち、亀頭とのあいだに透明な糸を引く。
麻衣は右手で粘液を怒張に絡めながら、猛烈な勢いでしごきたてた。
「は、はひぃぃっ！」
「イキそう？　イッてもいいのよ」
言われなくても、これ以上の自制などとてもできるわけがない。
それでも麻衣が亀頭に顔を近づけてくると、孝太郎は一瞬ためらった。
射出口から彼女の鼻先まで、わずか数センチしか離れていない。
このままでは、間違いなく美人ナースの顔を穢してしまうだろう。
年上のお姉さんなら、そんなことは十分承知しているはずなのだが、麻衣は手コキを繰り返しながら、唇をペニスの先端に押しつけてくる。そして舌先で張りつめた亀

頭を舐めまわし、さらには割れ口をチロチロと掃き嬲った。
青白い閃光が目の前で弾け、脊髄に熱い火柱が駆け抜けていく。
「あ、イクっ……イクっ」
孝太郎は腰を跳ねあげさせ、夥しい量の精液を鈴口から打ち放っていった。
「あンっ！」
男根が唇に密着していたため、液玉の散弾は凄まじい勢いで麻衣の鼻先を掠め、前髪にべったりと張りつく。それでも右手の抽送を止めないのだから、孝太郎は腰を何度もひくつかせ、そのたびに白濁の塊を立て続けに放出していった。
「ぐっ、ぐぅぅぅぅっ！」
あまりの大量射精で、腰の奥に鈍痛が走る。
およそ十回近くは脈動しただろうか。
孝太郎がうっすらと目を開けると、麻衣の顔は額から鼻筋、そして唇から顎まで精液の雫にまみれていた。
「……あったかい」
美人ナースはあどけない表情で呟いた直後、口元に垂れてきた白濁の塊を左手の中指で掬い取り、窄めた唇のあいだに導いた。

濃厚な樹液を味わい尽くすように指先を貪り、上目遣いで童貞少年を仰ぎ見る。
そしていまだひくつく牡茎を再び口中に招き入れ、ねっとりとした舌遣いでペニスを清めていった。
（あ……あ。き、気持ちいい。真面目そうな顔をして、何てエッチなことを……）
敏感になった亀頭を、柔らかい舌がまんべんなく這い回る。
快楽一色に染めあげられた孝太郎は、そのまま膝から崩れ落ちていきそうだった。

4

麻衣は顔を洗ったあと、孝太郎を脱衣場に連れだし、バスタオルで身体に付着したお湯の雫を丁寧に拭っていった。
少年の顔は惚けたように虚ろのまま、頭の中はまだボーッと霞がかっている。
快楽があまりにも大きすぎ、いまだ身体中に射精の余韻が残っているようだ。
「ふふっ。まだ勃ってる」
「……え」
麻衣の言葉に、ようやく我に返った孝太郎は、自身の股間を見下ろした。

放出したばかりにもかかわらず、あろうことか、牡肉は八割方の勃起を示している。
(昨日だって、桃子さんにたっぷり出してもらったのに)
自分でも呆れるほどの絶倫ぶりだった。
「これじゃガウン着ても、目立っちゃうよ」
麻衣はそう言いながら、ギプスを保護していたビニール袋を取り外し、背中のほうからガウンの布地を孝太郎の腕に通していく。
腰紐が結ばれると、美人ナースは右手を口元に寄せてクスリと笑った。
股間は高々とマストを張り、まるで硬い棒でも仕込んでいるかのようだ。
孝太郎が口元を引き攣らせると、麻衣は手のひらで裏茎をそっと押しこみ、布地を平らにならした。
「あうっ」
たったそれだけの行為でも、肉筒は快美を感じてしまう。
「まだ、ちょっと目立つみたいね」
亀頭の部分だけが、飴玉のようにポコッと膨らんでいたが、それ以上の手立てがないのか、麻衣はそのまま浴室の扉を開け放った。
「さ、行きましょう」

「は、はい」
午後七時過ぎということもあり、廊下は多くの患者やナースが行き来している。
孝太郎はやや前屈みになり、麻衣の背後に隠れるようにして病室に向かった。
浴室からそれほど距離がないのが、せめてもの救いだ。
(いったい、どうしちゃったんだ。勃起が全然収まらないよ)
ただ歩いているだけで、裏茎にガウンの布地が擦れ、心地いい快感が走り抜ける。
桃子、麻衣と、続けざまに過激な行為を受けたことで、一気に盛りがついてしまったのだろうか。
孝太郎は何とか気を逸らそうと、後ろから麻衣に小声で謝罪した。
「さ、さっきは……ごめんなさい」
「何が?」
「あの……その……顔に出しちゃって」
「いいのよ、私が好きでしたんだもの。でもホントに誤解しないでね。いつも、あんなことばかりしてるわけじゃないんだから」
「は、はい」
当然のことだが、経験豊富な大人の女性でも恥じらいはあるに違いない。

麻衣は先ほども同じようなセリフを口にしていたが、孝太郎は自分だけにしてくれた特別な行為という点に、なぜか安堵の胸を撫で下ろした。
男はいつも、かわいい女の子ほど、永遠に聖女でいてほしいという身勝手な願望を抱いている。
もちろん十代の童貞少年に、異性の心の内をはかれる経験値などなく、孝太郎は彼女の言葉を素直に信じていた。
（玲子先生も言ってたけど、本当にモテモテっていう感じだな。こんなこと、一生に一度きりかもしれないぞ）
沙也香を一番好きだという気持ちは覆らなかったが、桃子の言葉責めを駆使した手コキ、麻衣のねっとりとした口戯とお掃除フェラは、あまりにもポイントが高い。
童貞少年の心が、エッチなお姉さんたちにぐらつくのも無理はなかった。
「はぁ。何だか……私も変な気分になってきちゃった」
「え？」
麻衣の独り言は、声が小さくて聞き取れない。
孝太郎が問い返そうとした直後、二人は病室に到着していた。
「さ、入って」

「は、はい」
美人ナースは気が急いているのか、引き戸を開けながら孝太郎を慌ただしく促す。
その瞳はいつの間にかしっとりと潤み、頬も桜色に染まっていた。
「孝太郎君って……童貞？」
「は？」
想定外の問いかけに、聞き間違いかと思ってしまう。
後ろを振り返ると、麻衣は扉をぴったりと閉め、後ろ手で内鍵をカチリと閉めた。
（そ、そうだ。オバさん看護師は帰っちゃったし、着替えの世話は麻衣さんがしてくれるんだっけ）
ガウンからパジャマへ、パンツも穿かせてもらわなければならない。
密室の中で、再び全裸を晒す状況を思い浮かべた孝太郎は、期待感から心臓の鼓動をトクトクと拍動させていった。
「童貞なの？」
「あの、その……」
羞恥から俯いたと同時に、股間の逸物が再びガウンの布地をむっくりと盛りあがらせていく。

性欲のスイッチが完全に入った孝太郎は、全身の血液を中心部に集中させていった。
「恥ずかしがらなくていいから、正直に言って」
手コキとフェラチオ奉仕は、年上のお姉さんも昂奮させていたのかもしれない。
麻衣がゆっくりと近づき、首を傾げて見つめてくると、孝太郎はコクリと小さく頷いた。
「やっぱり！　かわいい、食べちゃいたいくらい」
「そんな……食べるなんて。あっ……」
美人ナースが身体をぴったりと密着させ、ふくよかなバストを胸に合わせてくる。
桃子や玲子の巨乳には及ばなかったが、手のひらにすっぽりと収まりそうな小高い乳丘の感触も心地いい。
孝太郎の肉槍はガウン越しに完全勃起し、麻衣の下腹をそっと突きあげていた。
（あぁ、麻衣さんのお腹に、おチンチンがあたっている！）
思わず腰を引いたものの、美人ナースは両手を孝太郎の臀部に回し、自らの下腹部をグッと押しつけた。
「……あっ」
まろやかな曲線を描く、柔らかい腹部が裏茎を圧迫してくる。

「見たい？」
「え？」
困惑顔で腰を捩らせていた孝太郎は、麻衣の放った言葉に目を見開いた。
（ま、まさか……）
わかっていても、つい問いただしてしまう。
「見たいって、何をですか？」
「お・マ・〇・コ」
花びらのような唇の隙間から、女性器の俗称が飛びだした瞬間、孝太郎は一瞬にして顔を茹でダコのように真っ赤にさせた。
見たくないわけがない。
男にとって、女性のアソコはまさに神秘の花園。
どんな形と構造をしているのか、膣の中はどうなっているのか。
匂いや感触はもちろんのこと、どれほど夢想してきたことだろう。
胸が締めつけられるように苦しく、唾を呑みこむことさえままならない。
熱病患者のように頭をボーッとさせた孝太郎は、無意識のうちに首肯していた。
「ちゃんと言ってくれなきゃ、いや」

「……み、見たいです」
掠れ声で答えると、麻衣は身体を離し、ベッド脇に歩んでいく。そして身体を反転させてベッドに腰を下ろし、両足を持ちあげるようにゆっくりと開いていった。
（あぁぁぁぁぁぁっ!!）
まさに、心臓が口から飛びでてきそうな衝撃だった。
何と麻衣はショーツを身に着けておらず、女の秘部を余すことなくさらけ出していたのである。
スカート部分の布地は腰のあたりまで捲れ、股間の中心を隠すものはいっさいない。
麻衣が下着を脱ぐ時間的余裕は、少しもなかったはずだ。
つまり、孝太郎を介助する前からノーパンだったことになる。
もしかすると、彼女は最初からこうなることを目論んでいたのかもしれない。
美人ナースは両足をM字に開脚すると、舌先で上唇をなぞりあげた。
「近くで見ていいのよ」
切なそうにたわんだ眉、しっとりと濡れた瞳、紅色に上気した頬。
何と扇情的な顔つきをするのだろう。
脳幹を瞬時にして痺れさせた孝太郎は、牡の本能の赴くまま、麻衣のもとにふらふ

らと歩んでいった。
（こ、これが……おマ〇コ）
床に両膝をつき、恥丘の膨らみに貫くような視線を浴びせる。
初めて目にした大人の女性の恥部は、峻烈な印象を童貞少年に与えた。
ふっくらとしたプライベートゾーンは、抜けるような白さを見せ、肌がひと際過敏そうに見える。中心部に二枚貝を埋めこんだような陰唇は、やや肉厚で、誇らしげに外側へ突きでていた。
薄めの恥毛の真下、笠のように小さく膨らんだ包皮の下に陰核が息づいているのだろうか。
二枚の花弁の狭間から、鮮紅色の粘膜が微かに覗き見える。
そこはしっぽりと潤み、男根の侵入を待ちわびるかのようにひくついていた。
（あぁ、すごい、すごい）
もはや、ありきたりの感嘆詞しか思い浮かばない。
孝太郎が目を血走らせながら顔を近づけると、ムアッとした熱気とともに、甘酸っぱい香りとヨーグルトのような発酵臭が鼻先に漂ってきた。
（ただ匂いを嗅いでいるだけなのに、何でこんなに胸がざわつくんだ!?）

不可能だとはわかっていても、触ってみたい。
今さらながら、両腕にギプスを嵌められた状況が恨めしかった。
孝太郎が性的昂奮から両肩で喘ぐと、上から右手がすっと下りてくる。
「もっとよく見せてあげる」
麻衣はそう言いながら、人差し指と中指で陰唇を左右に押し開いた。
（あぁぁぁぁっ。見える、中まで見えるぞ！）
小鼻を膨らませ、これ以上ないというほど目を剥いてしまう。
女性の膣の中は、まさに複雑怪奇な作りをしていた。
上方に位置する肉の垂れ幕には、尿道口と思われる小さな穴が開いている。
下方のぽっかりと開いた膣道から覗く珊瑚のような肉塊は、ねっとりとした粘液で覆われ、まるで折り重なるように連なっていた。
膣壁があわびのように蠢くと、媚肉の狭間から濁った淫液が滲みでてくる。
孝太郎は瞬きもせずに、美人ナースの秘芯を凝視していた。
情欲の炎が燃え盛り、滾る欲望が全身に吹き荒れる。
ビンビンに反り返ったペニスが、ガウンの前合わせの隙間から飛びでてくる。
理性を忘却の彼方に追いやった童貞少年は、飢えた獣のように、濡れそぼった恥肉

にかぶりついていった。
「あンっ！」
麻衣が小さな悲鳴をあげ、身体をピクンと跳ねあげさせる。そして両足を百八十度の角度で開き、孝太郎の頭を両手で掻き抱いた。
「いやっ、だめっ。ひっ……ンぅぅぅぅっ！」
女性器の性感帯が、どこにあるかなどわからない。
孝太郎はヌルリとした二枚の花弁を陰核ごと口中に吸いこみ、舌先を窄めて無我夢中で愛液を啜りあげた。
「はぁぁぁぁっ！」
薄い皮膚に覆われた鼠蹊部がピクピクと引き攣り、うっすらとした内股の脂肪がぷるぷると震える。
童貞少年は大量に唾液をまぶし、割れ口を懸命に舐りあげた。
（あぁっ、俺は今、おマ〇コを舐めてるんだ！　すごく熱くて、やたらグニュグニュしていて、いやらしい匂いがプンプン漂ってくるっ!!）
口の周りを淫蜜と涎でベタベタにしながら、熱い感動が込みあげてくる。
酸味のきいた味覚が口腔に広がり、ピリリとした苦みが舌先に走り抜けると、孝太

郎の頭は強い力で後方に押しのけられた。
「もうだめっ！」
何事かと仰ぎ見ると、麻衣はバストを小刻みに起伏させ、眉尻を吊りあげている。そして声を裏返しながら、呆然としている孝太郎の腕を上から引っ張りあげた。
「立って！」
「あ、あの……」
「早くっ！」
調子に乗りすぎて、怒らせてしまったのだろうか。
孝太郎が立ちあがると、麻衣はガウンの腰紐を外し、前合わせのあいだから突きでた勃起を右手で握りこんだ。そのまま、亀頭の先端を手前にグイッと引き寄せられる。
「あうっ！」
ペニスの先には恥蜜で濡れそぼった秘芯が、ぱっくりと口を開いて待ち受けていた。
ここまで来れば、未経験の少年でもこのあとの展開は予想できる。
（つ、ついに、女の人とエッチができる瞬間がやって来たんだ！）
童貞喪失はできれば沙也香相手に捧げたかったが、こんなチャンスが二度とあるとは思えない。それ以上に孝太郎の性欲は、初体験のクンニリングスで、のっぴきなら

ぬ状況へと追いつめられていた。
一刻も早く、勃起を膣内に挿入したい。そして未知なる女体の中で、至高の射精を経験してみたい。しなやかな指が剛直を膣口に導いていくと、孝太郎は期待感から目を爛々と光らせた。
「はぁっ」
麻衣が細眉を切なそうにたわめ、熱い吐息をひとつ放つ。
真っ赤に張りつめた先端が、濡れそぼった窪みに押し当てられる。
ヌルッとした感触に射精感を高まらせた孝太郎は、咄嗟に下唇を噛みしめ、丹田に力を込めた。
「あ……ンっ」
真っ赤に充血した二枚の唇が宝冠部を挟みこみ、ペニスを手繰り寄せるように蠢動する。麻衣は再び舌先で上唇をなぞりあげたあと、自ら腰を前方に突きだしていった。
ニチュリという粘膜の擦れ合う音とともに、男根が膣の中に埋没していく。
「はぁっ、孝太郎君のおチンチン、硬くて大きい」
美人ナースの言葉も耳に入らないほど、孝太郎は下腹部を覆い尽くす快楽の大波に翻弄されていた。

（あ、あ……おチンチン全体が、柔らかいお肉に包まれてる）
麻衣が溜息を洩らすたびに膣壁がうねり、粘着質なヌメリが肉胴に絡みつきながら、怒張をキュッキュッと締めつけてくる。それはフェラチオにも似た快美を与えたが、ペニスに受ける感触は性交のほうが大きいようだ。
しっぽりとした生温かい媚肉に包まれたペニスは、早くも熱い脈動を訴えた。
「孝太郎君は、動かなくていいからね。そのままじっとしていて」
言われなくても、腰など少しも動かせない。
放出直後といえども、油断をすれば、すぐに絶頂の扉を開け放ってしまいそうだ。
麻衣は熱い吐息を放つと、M字開脚の体勢で腰をゆっくりと揺すっていった。
「あ……くぅっ」
「痛いの？」
「ち、違いま……す。気持ちが……よすぎて」
麻衣は孝太郎の体調を気遣ったあと、ベッドに後ろ手をつき、徐々にヒップの動きを速めていく。
前後動から上下に、そして時おり回転させては剛直を縦横無尽に揉みこんでいった。
「あぁ、いい。いいわぁ」

美人ナースも気持ちがいいのか、大量の愛液を湧出させ、結合部からジュプジュプとはしたない音が漏れはじめる。
孝太郎は言葉を発する余裕もなく、首筋に血管を浮き立たせるばかりだった。
熱い潤みにペニス全体を浸らせたまま、こなれた柔肉が上下左右から心地いい刺激を間断なく与えてくるのだ。
セックスがこれほど快楽的だとは、まさに期待以上だった。
「あンっ……だめだわ。すぐにイッちゃいそう」
やはり麻衣は、浴室にいたときから相当昂っていたのだろう。
細い腰をこれでもかとくねらせ、恥骨を孝太郎の股間にガンガンと打ち当ててきた。
スリムな体型の、いったいどこにこれほどのパワーを秘めているのか。
麻衣の腰はベリーダンサーのような動きを見せ、自ら官能の極みに上りつめようとしているかのようだった。
怒張が媚肉に揉みくちゃにされ、肉胴が膣壁に擦りあげられる。
あまりの気持ちよさから、童貞喪失の感動に浸る余裕すらない。
激しいスライドが繰り返されるたびに、脳裏に白い膜が張り、身体ばかりか五感が痺れてくる。

筋肉を強ばらせ、射精を堪えるだけで精いっぱいの孝太郎だったが、いよいよ臨界点が近づいてくると、自然と腰が律動していった。
牡の闘争本能に火がついたのか、それともこのまま射精したのでは男がすたるという心理が無意識のうちに働いたのか。
いずれにしても、孝太郎は鬼のような形相で、麻衣の膣の中を撹拌していった。
「あ、孝太郎君は動いちゃだめっ」
美人ナースの声は、もはや耳に届かない。
どうせ射精が間近なら、自分もセックスを心ゆくまで楽しみたい。
麻衣のヒップは動きがピタリと止まり、肌の表面が微電流を流したかのように震えていた。
パンパンに膨張した肉棒が、膣壁を猛烈な勢いで擦りあげていく。
やがて美人ナースは口を徐々に開け放ち、眉間に無数の縦皺を刻みながら咆哮した。
「ひぃンっ！　イッちゃう、イッちゃうっ!!」
とろとろに蕩けた膣内粘膜が、ペニスをこれでもかと引き絞る。
麻衣は次の瞬間、すでに包皮から顔を覗かせた陰核を、孝太郎の下腹に擦りつけた。
「はぁぁぁぁぁっ！　イクっ……イクぅぅぅっ」

エンストした車のように、麻衣が腰をわななかせ、媚肉をキューッと収縮させる。
男根の根元を強烈に締めつけられると同時に、孝太郎もペニスを膣深くズンと突き刺した。
（こっちも、イ、イクっ！）
弾けるような快感が背筋を突き抜け、熱の塊が体外に向かってほとばしっていく。
孝太郎はこめかみの血管を膨らませると、残るありったけの樹液を麻衣の中に放出していた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/